バイロンの『天と地』

——自我の解放と救済——

黒田　修

序

詩人（George Gordon, Lord Byron）自身が「精神の劇場」[1]と呼んだ幾つかの作品のうち，『カイン』[2]（*Cain : A Mystery*）につづいて書かれた晩年の作『天と地』[3]（*Heaven and Earth : A Mystery*）を取り上げる。『カイン』と創作時期が近接しているということもあって，基調となる精神に同質のものが流れている。事実題材をやはり旧約創世記に求めたばかりか，『カイン』で追ったテーマをひきつづき追求している。『カイン』の場合は〈兄弟殺し〉，『天と地』では〈ノアの方舟〉というように表面上扱った題材に違いはあるものの，底には同じテーマが一貫して脈打っている。

それは〈自我の解放と救済〉である。このテーマの奥に実は，〈死〉という人間にとって最初で最後の問題が横たわっている。〈兄弟殺し〉では人類初の死が，そして〈ノアの方舟〉では人類の滅亡が，解放と救済の希求をいやがうえにも前面に押し出させるのであるが，人類の滅亡ということになると殊に，今世紀末に予測されるさまざまな危機が現実に迫ろうとしている現代に正に大きく差し響いてくる。

実際これまでの世紀末にも数々の不安はあったであろうが，〈自我の解放と救済〉というテーマが現代ほど強烈に意味を持つ時代は他にないであろう。人類は既に地上を何度も滅ぼすだけの核兵器を保有し，力の均衡という馬鹿げた一触即発の抑止力を正気で神と頼まざるを得ないところに自らを追い込んでいる；地球を取り巻く大気の温室効果のために極地の氷が溶けて海水位が上り殆んどの文明都市は沿岸にあるため水没してしまう恐れがあるという；火山爆発などの影響で異常気象が起こり，それが農作物に甚大な被害を及ぼし挙句は世界的な人口増加に致命的な食糧危機をひき起こすともいわれる；しかもそれがエネルギー危機と重なって世も末の恐慌をきたし，延いては新たな世界大戦の引き金となりかねない；そのほか乱伐や化学物質による大気や水質の汚染など生態系の破壊が異常な速度で進んでいる。現代人はこのように数え上げたら切りがない前代未聞の不安をかかえて生きている。

このような事態のために，詩人の描く〈ノアの方舟〉は旧約の世界から時代をはるかに越えて現代にこそ象徴的に重要な意味をもって浮かび上がってくるのである。そこで，〈自我の解放と救済〉という詩人の意識の上での急務を私自身のそれとして考えてみよう

と思う。なぜなら全ては〈自分〉の問題で，詩人も自分，そして作品を媒体にして関わる読者としての私も自分であるから，詩人の延長である作品のそのまた延長である読者としての私の内部に詩人がかきたてた部分すなわち詩人の自分と私の自分とが合わさったところを〈自分〉という〈ひとつ精神〉の劇場として見て，詩人が語り尽してはいなくても言い足せば当然ひき出されてくる部分まで含めて，現代という時代に立つ者として，私の中の現代に詩人がどう生きるかを明らかにしていきたい。

I　神への呪詛

詩人の創作態度が大体において，思想や独自の言葉を構築するといった凝った作業をするのではなく，誰に遠慮もなく思うままを噴出するというやり方であるところから，作品にぶつけられる形でセンチメントが出てくる。それは『カイン』でもそうであったが，この作品を通じても悲痛な〈叫び〉となって発せられる。叫びそのものには条理も論理もいかなる美しさもない。悲しさ痛々しさ，あるいは醜さがあるばかりだ。しかしそこには真実がある。それは人間というものの置かれている非情な境遇のその真っただ中から自然にほとばしり出るからである。それでも叫ぶなどということは誰にでもできる芸当だから，ああ叫んでいるぐらいのことで済んでしまう。というわけで作品としては余り見向きもされないことになる。

事実この作品は，『カイン』が後世に評価を受けたのに比べると殆んど問題にされていないと言えるほどである。『カイン』の場合，叫びは同じところから出てくるものであるにもかかわらず，形而上学的セットがより豊富により神秘的に組み立てられてあった。それが『天と地』の方では，周知の洪水とノアの方舟のセットのみに頼っている感がある。つまり『カイン』においては対立と葛藤が読む者に未知の期待を抱かせたが，『天と地』ではそれが殆んど先が読める形になってしまっている。だからといって同じところから発せられる叫びであるのに，その背景となるセットが単純であるという，ただそれだけの理由のために，この作品の方がずっと軽く見られてしまうのだろうか。

あるいはそれは，この作品が未完の印象を与えるからということもあるかもしれない。大まかに見れば，この作品には関心の赴くところが二通りあって，その一つは登場人物たちの成り行きで，もちろんこれが物語としての展開を与えるものとなる。もう一つは神に対する呪いで，これが作品を通して流れる精神の基調を形成している。そこでもし，物語の展開の方にのみ注目するだけだと，登場人物たちの成り行きが語り尽されていないという不満が生じることはあり得る。

サミアサ（Samiasa）とアザツィエル（Azaziel）は九天使中最高位の熾天使である。彼らは人間の美しい姉妹に恋をした。その姉妹というのがカインの血をひく娘たち，アホリバマ（Aholibama）とアナ（Anah）で，彼女たちの方も思いを寄せてくる人間の男たち，

イラド（Irad）とジャフェット（Japhet）には目もくれず，熾天使たちに夢中である。人間の娘たちと天使たちとの恋のこの部分は，創世記第六章二節に「神の子たちは人の娘たちの美しいのを見て，自分の好む者を妻にめとった」とあるところに依拠している。しかし聖書には，それがカインの血をひく娘たちであるとは書いていないし，又，彼女たちがまるで魔女のように呪文を唱えて天使たちを呼び寄せたりすることにも触れてはいない。これらは詩人の創作である。更に創作として詩人らしい特徴が出ているところで，洪水の時が迫って熾天使たちが姉妹を救い連れ去ろうとすると，九天使中第八位の大天使ラファエル（Raphael）が天の使いとして降り立って，熾天使たちが他の善天使のようには地を離れて本来の場所に戻らずノア（Noah）たち以外の人間を救おうとするのは神の命に背く謀反の罪だとして堕天使の宣告をして飛び去るくだりがある。ここに神と戦って敗れた堕天使ルーシファあるいはサタンのイメージが重なり，詩人の世界ではカインに連なる娘たちもカイン同様悪魔の系統に入るということが示される。

悪魔の系統というと，アナに片思いするジャフェットもそうである。彼は洪水から守るためアナを方舟に乗せてくれるよう依頼するが，ノアは彼女が神に嫌われたカインにつながる者であるし，まして神の命に背くわけにはいかないとして頼みを断る。聖書によると，ノアとその家族は悪のはびこった世の中で唯一，神の前に正しい人として選ばれ，方舟に乗ることを許された者たちである。ところがこの作品では，ジャフェットはノアの長子でありながら，頼みを拒絶する時の父の断り方に疑問を持ち，神の決定に不審を抱く。これはむしろ前作の主人公カインのイメージであるが，実はこの人物も詩人の創作である。アナたち姉妹がアザツィエルたち堕天使に連れられて洪水の難を逃れ飛び去った後，大波が押し寄せてくる時に至っても，彼ジャフェットだけはなかなか方舟に乗り込もうとはしない。そこで劇は終る。

この終り方において，又神と堕天使，それから堕天使と美しい恋人たち，更に美しい恋人たちと彼女たちを追う人間の男たち等の成り行きにおいて，『天と地』と題する作にしては物足りないという批判は免れないかもしれない。しかし壮大なスケールのパノラマを期待する余り未完だとして見捨ててしまうにはこの作品の持つもう一つの面まで切り捨てることになるので惜しい気がする。詩人がギリシア劇のように単純で鮮明な本格的イギリス劇をものしようとした意図[(4)]からすると，この作はこれで完結していると見るのがむしろ妥当ではなかろうか。

「精神の劇場」として一つの印象を残す，そのために単一で明快な訴えを強調する。〈ノアの方舟〉というセットを借りてはいるが，それは決まり切った枠組である故に一層使い易くそこにある神の命という掟に対して呪い反逆するというその心をより明確に出すためにこそなのである。だから物語の展開としては飽くまでも聖書にある如く，ジャフェットも最後にはノアたち家族と共に方舟に乗り救われるということは語り尽されなくとも当然の結果として思い浮かべられる。又熾天使と人間の娘たちの運命も，神の使い大天使

ラファエルとのやりとりから，自ずと堕天使の典型サタンと神との永遠の戦いが思い起こされてくる。このように全てを語り尽さなくても先入観に火をつけるだけでイメージが広がってくるような起爆的枠組を下敷にしているところが大事なのである。ということで，この作品の主眼は物語の展開にあるよりも，作品全体を支える精神としての〈神への呪詛〉の方にあると言うべきであろう。

神を呪うに至るまでに，神に対する疑いがある，楯突き敗れて，落された恨みがつのる，そして遂に呪いと化す。力づくではどうしても叶わないからである。この呪いの権化こそサタンである。この作では『カイン』で思いっきり放出した悪魔的な部分が少し抑えられている。それでも悪魔的な部分すなわち神に対する懐疑・反逆・怨恨・呪詛の心は作品の随所に見られる。

ジャフェットは永遠のやすらぎを得ようとしながら，そうすればする程それだけ逆に苦しまねばならないという。ちょうど前作のカインの役割を演じている。「愛こそそれにふさわしいものかもしれないと思い，その愛をもって愛の中にやすらぎを求めてきた[5]」彼は，アナに対する愛が報いられないのを知る。そのどうしようもない苦しみを少しでもいやすために，同じくどうしようもないところ，恐ろしく邪悪で危険な霊たちが地の内奥から影のように出入りするといわれるほら穴に行く。悪魔とされるルーシアァがカインに感応して被造物界の虚無を見せたように，地の霊も洪水の後の新しい世界が旧世界と全く変わらず悲哀そのものの世界であることをジャフェットに示す[6]。それに対し，それも贖(あがな)い人キリストの到来するまでのことだとジャフェットが答えると，それまではやはり苦渋に満ちた空しいあがきの世界がどうしても続かねばならないということを告げ知らせる。その際地の霊はジャフェットに，「生き残って食ったり飲んだり結婚したりすることを恥ずかしいとは思わないのか。これまでに弱められ飼い馴らされた卑しい心のまま，これだけ広範な破壊について知らされても，世界をかき消す波にのまれる悲しみも勇気も持たず，神の好んだ汝の父と難を逃れ，水没した地の墓の上に都をたてて平気なのか[7]。」と問うている。この問いかけによって彼は自分の立場を明確に自覚し，方舟に乗ることをためらうのである。ジャフェットは言う：

> Can rage and justice join in the same path ?[8]
>
> 怒りと正義が同じ一つの道を相携えていけるものだろうか。

彼が逡巡するのは，このように洪水という怒りの決定を下した神の正義に疑惑を感じ始めているからである。

彼ジャフェットよりも徹底した態度をとったのは，熾天使アザツィエルとサミアサ，そしてカインの血をひく姉妹アホリバマとアナであった。遂に神に対して反逆の姿勢を表わ

すまでに至ったが，彼らはやむなくそうしたのであった。そして彼らが神の代わりに選んだのは互いの〈愛〉であった。

詩人は，これら彼らの言動をより徹底させる形で，死すべき者たちの声をコーラスにして表わしている。このコーラスの部分があるために単一で明快な訴えが強調されて全体がより生きてくる。死すべき運命の者たちは逃げまどいながら，そして波にのまれながら，助かる運命にあるジャフェットに向い，更に神に向って声を限りに叫ぶのである。それは助かりたい一心の哀願であり，なぜこのような目に会わねばならないのかという無念の恨みであり，挙句の果ては神に対する断末魔における呪いとなる。

(9)

Accursed
Be he who made thee and thy sire!
We deem our curses vain; we must expire;
But as we know the worst,
Why should our hymn be raised, our knees be bent
Before the implacable Omnipotent,
Since we must fall the same?
If he hath made earth, let it be his shame,
To make a world for torture.

汝と汝の父を創りし者こそ呪われよ！
呪ったとて無駄なことは分っている；死なねばならないのだから；
が最悪の事態を知るわれらが，
どうして無情なる全能の神の前に，
賛美歌を歌いひざまづいたりしないといけないのか，
どのみち落ちなきゃならないのに？
もし彼がこの世を創りし者ならば，
世界を責め苦に会わせるなど，
恥ずべきは彼だ。

これは，死すべき運命の者たちが今まさに波にのまれんとする時の叫び声がコーラスとなったものである。しかも正しく詩人の描く悪魔（サタン）の系統の叫びである。このように見てくると，ジャフェットが懐疑を，熾天使たちとカインの血をひく姉妹たちが反逆を，そして怨恨や呪詛は死すべき者たちのコーラスがそれぞれ代表しており，それらを通して全体としてみれば，サタンに象徴される〈神への呪詛〉が一貫してその精神の本質であることが分る。

Ⅱ サタンの愛

作品に表わされた〈神への呪詛〉はこの「精神の劇場」を支える柱であると同時にそのまま詩人の姿勢でもある：詩人がサタンとなって神に呪詛を浴びせる。この時，詩人のサタンはどういう性格なのか，神とはどのような神なのか，更に又詩人は〈ノアの方舟〉をどう見ているのであろうか，それを追ってみたい。

詩人がサタンとして立つ際，先に触れたように必ず〈愛〉の心を支えにしている。呪詛とは非常に矛盾するようではあるが，愛こそ詩人のサタンの本質である。呪いはどうして生じるか。愛したいのだけれども，どんなにしてもその愛が通じない。愛するということは愛の心に同化させて全てを取り込むことである。ところが，どうしてもかたくなに愛の心になじまないものがある，その時愛はどうするか。やはり愛で包み同化させようとするであろう。黙って退くことは決してない。どこまでも常に積極的に働きかけようとする。それを頑として同化することを拒むものがあるとするとどうしても相容れない訳であるから，取り込もうとする方と取り込まれまいとする方とで互いに戦いである。この時愛は呪いと化している。離れて立ち去るようなことはしない，もし離れ去ればその時愛ではなくなってしまう。呪いは愛の最終手段，飽くまでも同化させて取り込もうとする働きの顕れなのである。

これはしかし常識で考えれば確かに暴言である。神の愛というのは分るが，サタンの愛など聞いたことがない。だが詩人の場合はそうなのである。詩人にしてみれば選んだ者だけを救う神の方が悪ですべてを愛するサタンの方が善である：つまり詩人にとっては神の側に愛が見当らないからである。それどころか冷酷無比な怒りの暴君で，とても手がつけられない。地上に悪がはびこったからといって一方的に裁き，選んだノアとその家族及び彼らに必要なものだけを残して大洪水を起こし生きとし生けるものを一掃する。

これは唯一絶対の創造神で，もともとユダヤ民族の神であったが，風土に応じ時代に応じ又個人の資質に応じてその取り上げられる表情が変ってきた。特に罪の贖(あがな)い主イエス・キリストに取り上げられて大きく変貌し，世界的な神となった。いわば怒りの神から愛の神に衣替えしたのである。しかし数えきれない世代を経てきても，意識無意識を問わず人々の記憶に埋蔵されてあるこの神の元来の性格は拭い切れない。万物を創造すると同時に破壊する，則るべき掟を設け従わなければ罪として罰する，といった荒々しく恐ろしい，男性的・権威的・抑圧的・懲罰的イメージをどうしても人々の心は保持したままでいる。旧約の当時のユダヤ民族の風土と歴史に基づいた世界観からくるものであろうが，そのような世界観が今も昔もほとんど変わらないからである（それは創造と破壊＝誕生と死滅というこの現実が変わらないからである）。

作品にこの神が現われるのは題材が〈ノアの方舟〉という旧約の世界から選び取られた

ということに由来するだけではない。もちろん詩人が幼少期から聖書殊に旧約に親しんでいたことは事実であるが[10]，それだけでこのような神となって現われてくるのではない。むしろ詩人がやはり幼少期に強烈に影響を受けたカルヴィニズム（Calvinism）の精神土壌[11]を抜きにしては語れない。「人が生まれながらに天国か地獄に選別される[12]」というイメージは俗信的であるにしても，詩人の個人感情と結びついて抜き差しならぬものとして詩人の精神に刻印されている感がある。しかもこの作品に限らず「カイン」などの同系列の作品が冒瀆的であると非難を浴びた当時の同時代人の信仰の精神的風土も，詩人の姿勢から推して，詩人の幼少期の周囲の俗信的土壌と変わりなかったであろうと推察されるのである。もちろん，キリストによって普遍的に意識されるようになった〈愛〉という女性原理が，未だ人々の無意識の奥深くまで支配している創造神の圧倒的破壊性すなわち男性原理を取り込んで統合するというところまでいってはいなかったであろう。

もし詩人が作中の人物を借りて神を呪っているとすると，それは同時代人の神に対する態度に詩人が反撥し，詩人がそれを呪っているのである。詩人が描こうとすることは当然同時代人をも想定して書いているからである。先に引用したところであるが，ジャフェットが「怒りと正義が同じ一つ道を相携（あいたずさ）えていけるものだろうか[13]」と言ったのをとらえて，「罰当（ばちあた）りめ！[14]」（“Blasphemer!”）と父であるノアがののしるところがある。ここ一つ取り上げても当時の人々が，少なくとも詩人の周囲の同時代人たちが示していた神に対する姿勢がうかがわれるのである。同時代人にとっては信ずる神が怒りと正義を同時に表わしても何の不思議も抵抗もなくすんなり受け入れられる，あるいは不思議がったり抵抗を感ずることもなく鵜呑みにしているだけのこともあるだろう，どちらにしてもここのところが詩人には腑（ふ）に落ちない。これ程慈悲もなくむごい神であるのに，それをなぜ卑屈にも崇め奉らないといけないのか，愛など一片もないではないか，それをなぜ白々しくも信じておれるのか，あるいは信じているようなふりができるのか，神に愛がないだけではない，そんな神を信じている者こそ愛がないではないか。このように詩人が言えば，不敬な，という答えが返るのであろう。これは恐らく詩人の頭の中で交わされたであろう問答であるが，同時代人の反映を考慮すると，あるいはひょっとしたら実際に詩人がジャフェットのように言い，誰かがノアのように答えたことがあったのかもしれない。現代のそれも非キリスト教徒にしてみれば，ごく当り前で極めて素直な問いで，不敬だという答え方の方が偽善的だと思えるが，当時の人々からすればひどく冒瀆的なことだと感じたのであろう。

このように詩人が西洋人としてしかもキリスト教徒としての肉体をとって生を受けたことで，この唯一絶対の創造神も必ず何らかの形で対応されないでは済まない性質の記憶として詩人の血と肉のうちに埋め込まれている。このことは詩人の同時代人にとっても同じことであったが，その対応ぶりが異なるのである。権威的な男性原理を押し進める懲罰的無慈悲な神（あるいは運命）に対し，詩人のことを不敬だと非難する同時代人は，ただその強大な力の前におとなしくひれ伏すのみである。作品の中でその姿はちょうど神に対す

るノアの姿勢で表わされている：ノアは神の予告に従って方舟をつくり洪水から家族たちと共に救われる。彼は従順に神の命を守った。そのどこがいけないと同時代人たちは言うであろう。ところが詩人にとってこれ程義憤を覚えることは他にない。神の命を守って自分だけ神の認めるところとなればいいのか：他の全てのものが滅ぼされてもそれは自業自得だと言うのか。

ノアが方舟に乗り，他は罪人であるからしようがないとして結果的に見捨てた時，〈罪〉とは何であるかを詩人は問う：「この子が一体神を怒らせるようなどんな悪いことをしたというのでしょうか。」[15]―― これは コーラスの一部の独唱部分で，死すべき運命の者たちのうち，溺れながら抱いている乳離れもしていない自分の子を生き残る運命のジャフェットに託そうとする一人の母親によって歌われる。聖書によると，もちろんこの子も洪水にのまれてしまうはずであるが，なんでこのような子に罪があるものかと詩人は思うのである。洪水で滅ぶ者に罪があるならば，洪水では救われて生き残ってもどうせ死ぬ者をどう説明するのか，洪水で死ぬ者には罪があり，救われてから後に死ぬ者には罪がないとでも言うのであろうか，むしろ他を見捨てる方が罪ではないのか，と。これに対しノアたちは「全ては神の御旨だ」[16]と答えるのである。

「全ては神の御旨だ」とする人々に対して，詩人はその考え方，その信仰のあり方，その姿勢に，どうにも憤懣やるかたない程に反撥する。そんな悟りかえったような対応に我慢がならないのである。ノアが神に覚えられ方舟によって災厄を免れたことを普通救われたと受け取るが，詩人にしてみればそのようなことは何の救いにもならない。[17]洪水の後も生き残ることになるノアたちの方が更に不幸である。水に没した者たちの遍く(あまね)広がる墓標の上に空しくその死を悼まねばならないし，しかも自分たちが迎える死と苦しみは更にこれからのことであるのだから。[18]故に詩人が〈ノアの方舟〉に見たものとは：ただ生き残っても何にもならない，かえって死を乗り越えられない限り苦しみ続けるばかりだということになる。

ここに至って詩人と詩人を不敬であると非難する同時代人との間に，神の受けとめ方の違いがはっきりと出てくるのである。それは創造神ヤハウェの〈破壊性〉に対する目の向け方の違いである。破壊性は人間の運命として表われる，運命とは現実の死と苦しみである。この死と苦しみの受けとめ方が違うわけである。しかしその受けとめ方の違いもよく考えてみれば，何も詩人と詩人を非難する同時代人との間だけに限ったことではない。それはいつの世にも普遍的にみられる生き方の違いである。極端な言い方をすると詩人もその同時代人も共にたまたまキリスト教徒であったためにヤハウェという神に固執しなければならなかったというだけのことで，根本的な違いは人間の運命を疑うか疑わないかのみである。

詩人を非難する同時代人は生の破壊性を疑わない普遍的な人々の代表である。彼らは人間よりも神を大事とする。それ故神の計画を絶対とし，いかなる運命も一切が神の御旨で

あるから，神のなさることには微塵の誤りもない，それはそれなりの意味があるのだとして死も苦も甘受できるのであろう。というのはむしろ逆で，現実には，死と苦しみを少しでも甘受できるがために創造と破壊即ち誕生と死滅を神の業と見たてしかもそこに人間的な配慮を求めるのである。これは死と苦という非常な運命にもてあそばれる悲しさからくる一つの知恵であろう。しかしそうしたからといって現実は依然として何も変わりはしない。認め難き苛酷な運命に神の意志と計画を付与すれば，神によって見守られているという安心が生ずるだけである。相変わらず破壊というこの地上の惨(むご)さをそっくりそのまま受けないとおれないから，苦しいのは苦しいし，死ぬのはやはり嫌だというのが現実であろう。故に詩人には何の解決にもならないのである。

だから詩人にとってはそのような知恵も神とは頼めない。死と苦という現実を目の前にする時，そのような運命を克服するにはむしろかような知恵は間違いのもとだとさえ直感する。なぜならあるがままをよしとして疑わず生きている人々が地上の破壊性を受け入れ易くするために信奉する「神の御旨」も窮極のところ，他はどうあれ自分一人救われればいいとするところから出てくるからである。又「神の御旨」を信じる時，人は同時に意識するしないにかかわらず後生をも信じているのである。そうでなければ「神の御旨」など意味がない。来世でなくともずっと後にはいつか必ず自分は救われるという固い信念がなくては「神の御旨」は成り立たない。彼らにとって自分は永遠に自分であり，他（人）は永遠に他（人）なのである。

一体，〈他〉とは何であろうか。そんなものがこの世にあるだろうか。他は〈自分の意識〉にのぼって初めて実在するのであるから，現実に他は実在すると幾ら主張しようとも，自分の意識がなくては存在し得ないはずである。[19] 仮りに自分の意識がなくなったとしてみる。その時でも他は実在すると主張する人は，自分の意識がなくなったとしても地上には他が幾らもいるのだから他はやはり実在するではないかと思うかもしれない。しかし，そのように言い張るとすると，それはまだ自分の意識がなくなってしまっていないのである。もし完全になくなってしまったところから言うとすれば，地上にあるものは全て〈自分の意識〉ばかりである。それを尚やはり他だと言い張るとすると，言い張る人の自分の意識がまだ少しも消え去ってしまっていないのである。ほとんどの人はこの道理がなかなか〈自分〉のものとならない。飽くまでも自分は自分，他人は他人だとしか思えない。

それはしかし無理もない。自分の意識だけは決してなくなることはないと固く信じているからである。いやそんなことはない，死ぬということが現にあるのだから，そんなふうに信じる訳がない，と言いつつ，自分の意識は死と共に消失するのだと思っている人でさえ，無意識のうちに自分の意識はなくなりはしないと思い込んでいるのである。その証拠にそのような人は自分の意識がなくなるとしていながら，その時に至っても地上にいる人々はあれは他人だ，決して自分などではないと必ず主張する。自分の意識がなくなってしまったところで，地上に生きているそれぞれの自分が自分のことであるとは思えないとい

うことであるらしい。しかし地上にいる人々はそれぞれに自分を意識し自分を感じながら全て自分のこととして生きているのである。決して他人として存在しているのではない。だから元来この宇宙には他人など一人もいないのである。

こう言っても，いや他人は他人だ，自分などではない，なぜなら自分というものは永遠に自分だからだと主張する人もいる。この人は死んだ後も何らかの形で自分の意識が永遠に続くものと信じているのである。あるいは意識が絶えず続かなくともいつかどこかで蘇(よみがえ)り，必ず再び元の自分を意識するようになると信じているかのどちらかである。いずれにしても永遠に自分は自分，他人は他人であると考える人である。しかしこの場合も考え違いをしている。もし意識というものが仮りに死の時かどこかで一度失われていて再び蘇ったとしたら，その意識は元の自分を自覚している訳であるから一旦途絶えていたにすぎない。ということは死を経ようが，又その後何度死を経ようが元の自分を自覚する限り同じ自分の延長であるから，意識としては確かに同じ自分である。ところがそれは一代限りのことでしかない。もちろんこの一代というのもこの地上の一回きりの生だけのことに限らず，元の自分を自覚するのであれば，どの世であろうとも何度生死を繰り返そうとも意識の上では一生と同じことだという意味である。つまりいくら自分の意識が永遠に続くと主張しようとも，どこかの時点で一代が終り一度でも過去のない全く新しい自分をあらたに意識しなければならなくなるとしたら，それは永遠に自分を意識していることにはならないではないかということである。しかも過去のない全く新しい自分を意識しなければならなくなるということはこの地上において既に誰もが自身で経験済みのことなのである。これをそれはただ生まれる時のショックで前生のことを忘れてしまうだけのことだなどと言ったとしても，思い出さない限りは全く別の自分として生きることになる事実を反論することはできない。もしこの地上において前生の記憶のある人がいても，その人とていつまでも自分の意識を永遠に保持しておれると言う自信はないであろう（もしいればその人は人間を超えているのである）。そしてそう言う自信がないとすると，自分の意識を自分で意識的に点けたり消したりできるわけではないから，いつなんどき少なくともこの地上に全く新しい自分として意識しなければならなくなるか分らないはずである。所詮自分の意識が自分のものではないから，二度とこの地上に過去のない新しい自分として生きるようになどならない，とは断言できない立場であることが分る。又全く新しい自分としてあらたにこの地上に意識することになる可能性を少しでも持ち，その可能性を打ち消す術を持たないのであれば，どこにしろ全く新しい自分として意識するようなことにはならないかもしれないではないか，とも言える立場にないことは歴然であろう。故に再び少なくともこの地上に過去のない全く新しい自分として生きるようになる可能性を打ち消せない存在であるということになると，これまで関係のない他人だとばかり思っていた〈他〉という存在がもはや他としては見えなくなってくるのである。少なくともこの地上にはもともと他などない，あるのは〈自分の意識〉ばかりである。そこから全ての意識は〈自分の意

識の変遷〉であるということがのみこめる。だから他人だとばかり思っていたものが全て自分であり，自分だと思っていたものが一個の自分のみではなく過去・現在・未来の他人全てを包含する意識であることが分った。このことわりを公式的に書くと，〈他＝自；自＝他〉ということになる。

さて，このことわりを踏まえると，他はどうあろうと自分一人救われればいいとする心を詩人が嫌悪し憤る[20]気持ちがよく分るのである。ありとある他者のあらゆる運命がもはや他人事ではなく，自分自身のことであった。それをどうしても他人は他人，自分は自分と見てしまうから，他はどうあろうと自分だけはというように他を切り捨ててしまう。この心が他人の運命を顧みさせない。他人の運命を顧みないということは，自分の運命だけは顧みているようであるが，先程のことわりにあるように関係のない他人のことだと思っていたようなあらゆる運命が，一度意識の死を迎えた後もいつ自分の運命としてふりかかってくるか分らないということになり，結局は本来の〈自分〉を真に救うことにならないどころか，もし自分は自分；他人は他人という認識のままでいくと，他の自分が元より自分自身であることを忘れて他の中の自分を汲み上げないから，いつも自分で〈自分〉を見誤り且つ損ねてしまうことになる。それ故破壊的な自然の猛威に輪をかけるように，絶えず殺りくや衝突や傷害から公害や病気や事故に至るまで人間によるさまざまな災厄がついて回るのである。そして今日現代においてその傾向は今やその殺伐とした方向に向って爆発寸前のところまできている感がある。ここに〈愛〉は見られない。詩人はそこを突いているのである。もし真に〈自分〉を救おうとするならば，少なくとも地球と地上の全ての運命を思わなければならない。

ノアたちだけが乗った方舟は詩人にしてみれば尚一層の悲哀と責め苦の舟[21]でしかなかった。〈ノアの方舟〉があるべき姿として詩人が望んだのは，地球の全てを乗せその舟ごとあらゆる悲しみから解放し，死と苦しみを離れた世界を約束する舟であった[22]。これは正に現代においては人類が〈宇宙船地球号〉に託す夢である。このような舟を願う心は自分一人救われればいいとする心とは明らかに異なる。自分一人の救済を願う者が神と頼んだのは「神の御旨」であった。では詩人が頼む神とは何か。詩人の描く〈サタンの愛〉こそそれである：掟と服従一辺倒の強圧的神（運命）に反抗するプロメテウスの愛であり，人類のみならず万物全てを愛する心根であり，キリストの「汝の隣人を愛せよ」というところから出てくるものと同質のものである。この愛は自分は自分；他人は他人としながら愛する愛ではない。全て自分であると捉えるところからくる愛である。

結

詩人が〈ノアの方舟〉に求めたのは自我の解放と救済であった。自我とは〈自分の意識〉のことであるが，詩人が自我の解放と救済を希求するのは，自分の意識に抑圧や限界を感

じ苦しみや悲しみを覚えるからで，そのような束縛こそ〈死〉に集約された破壊的現実がもたらすものだからである。自分の意識の解放と救済というと，ちょっと聞けば他はどうあろうと自分一人救われればいいとする心と同じように思われるがそうではない。詩人が作中で示した態度からすると，詩人の場合の自分とは宇宙に意識あるもの全ての〈自分〉であり，解放と救済とはありとあらゆる普遍的な死と苦からの解放と救済であることは当然である。なぜなら詩人の目に浮かぶ悲しみは人類のみにとどまらず，地の全ての悲しみを映しているからである。

Spirit. why weep'st thou ?
Japh. For earth and all her children.

霊：何故泣くのか？
ジャフェット：地とそのすべての子の故に泣くのです。

これをただのセンチメントとして片付けるわけにはいかない。

詩人がサタンと化し冒瀆の罪を犯してまでも強圧的な創造神とその破壊性を御旨（運命）として従順に従う者たちに反抗したのは，地球とそして人類を含む地上の全てが救われなければ真に〈自分〉も救われないと直感したからであった。故に破壊的な運命をしかたがないとしてそのままに耐え忍び続ける姿勢に欺瞞を感じ，その運命を何とかしようとあがくのである。この態度は，時に悪魔的であるとの非難を浴びることもある現代の科学に共通するものであるが，そこには悪魔的と言われようが本来〈愛〉の心がある。そしてこの愛の心をかき起こすべく詩人は叫び訴えるのである。神の御旨を唱えていつか自分のみが救われることを信じるのと，人間が自ら何とか道を切り開いていって救われるものなら地球ごと全てが救われるようにと願いを込めてあがくのといずれが真に神の御旨に近いか。

ただ悲しいことにこの愛の心も現実においては頑迷な迷妄と隣り合わせになっている。ほとんど人は，〈他＝自；自＝他〉ではなく，自＝自；他＝他の認識の方を押しすすめてしまう。自＝自；他＝他――もし罪というものがあるとすればこの認識の仕方こそ〈罪〉そのものではなかろうか，この認識のまま過ごそうとする故に，その報いとして破滅的な罰を自業自得として被らなければならない。とはいえ，そのような認識が誤りだと気づいたとしても，〈他＝自；自＝他〉のことわりを窮極において成就し得る者はほとんどいない。真に他を実感できないのみか，他の代わりに死ぬことなど到底叶わないからである。無意識のうちに，傷つき死ぬことを恐れてしまうからであるが，それは人間が一個の肉体をとっているところからくるのであろう。しかし考えてみれば，この肉体も灰と化してしまうようなものだから確固とした実在ではないはずであるのに，それが実感を伴うために真に実在するものと見え且つ感じてしまう。そこに何か錯誤があるとはうすうす気がつく

にもかかわらず，その実体感を否定しきれないでいる。だから，〈他＝自；自＝他〉のことわりも理念としては認識できてもそのまま実践できないという悲しさがある。この実践を自ら無意識のうちに阻み，〈他＝自；自＝他〉を真に意識化させないものとして人間の無明の部分に肉体というものが位置し，その部位に自＝自；他＝他の習性が頑としてとりついていると考えられる。あるいはというよりむしろ，自＝自；他＝他の偏執が源にあってそこからその具体化として個の肉体をとって現われてくるのではないかとさえ思える。肉体の方が先かあるいは偏執の方が先か，いずれにしても肉体に象徴される偏執が頑迷な無意識として，人類の道が開かれることを阻んでいる。これこそ罪といえば罪であろう。同じ無明の中を悪循環するからである。

科学にしてもそれが悪魔と言われるとしたら，科学する人々の愛の心のこの罪の部分即ち肉体という無意識の部位の〈偏執〉を言うのであろう。〈他＝自；自＝他〉の愛がありながら，どうしても自＝自；他＝他という偏執を押し進めるところから，〈死〉に集約されてくるところの運命が破壊的と見られ，延いては苦しみ悲しみとなってしまうのかもしれない。このため科学もまかり間違えば，凄まじい凶器となりかねない。詩人の〈叫び〉はここに生きてくるのである。人々がその心をコントロールして宇宙船地球号という現代の〈ノアの方舟〉を人類救済という悲願達成の方向へ向かわせることができるか否かはこの頑迷な偏執からいかに〈自分の意識〉を解放するかにかかっている。

注

(1) Peter Quennell (ed.), *Byron : A Self-portrait* (2 vols ; John Murray, 1967), II, 662.

(2) 1821年7月—9月（創作時期）

(3) 1821年10月（創作時期）

(4) Quennell, *op. cit.*, p. 671 ; Jacques Barzun(ed.), *The Selected Letters of Lord Byron* (New york: Crosset & Dunlap, 1953), p. 211.

(5) Thomas Moore, *The Works of Lord Byron : with His Letters and Journals, and His Life* (London : John Murray, 1836), p. 14 : I have sought it where it／should be found, ／In love—with love, too, which perhaps deserved it;

(6) Ibid., p. 21 : The new world and new race shall be of woe——

(7) *Loc. cit* : And art thou not ashamed／Thus to survive, ／And eat, and drink, and wive?／With a base heart so far subdued and tamed, ／As even to hear this wide destruction named, ／Without such grief and courage, as should rather／Bid thee await the world-dissolving wave, ／Than seek a shelter with thy favour'd father, ／And build thy city o'er the drown'd earth's grave?

(8) *Ibid.*, p. 43.

(9) *Ibid.*, pp. 47-48.

(10) L. A. Marchand, *Byron : A Portrait* (London: John Murray, 1971), p. 14.

(11) *Ibid.*, p. 152.

(12) Frederick A. Norwood, *The Development of Modern Christianity* (New York : Abingdon Press), p. 68.

(13) Moore, *op. cit.*, p. 43.

(14) *Loc. cit.*

(15) *Ibid.*, p. 47. What hath be done——／My unwean'd son——／To move Jehovah's wrath or scorn ?

(16) *Ibid.*, p. 40 : Live as he will it——die, when he ordains,.

(17) *Ibid.*, p. 21.

(18) *Ibid.*, p. 50 : To die ! in youth to die ;／And happier in that doom, ／Than to behold the universal tomb／Which I／am thus condemn'd to weep above in vain. ／Why, when all perrish, why must I remain ?

(19) *Ibid.*, pp. 26-27, cf.

(20) *Ibid.*, pp. 21.

(21) *Ibid.*, p. 50.

(22) *Ibid.*, p. 45 : Hear not man only but all nature plead ; A brighter world than this, where thou shalt breathe／Ethereal life, will we explore :／These darken'd clouds are not the only skies.

(23) *Ibid.*, pp. 18-19.